

手柄なし

清水 基吉

鎌倉右大臣源実朝は一四歳のころから和歌を作り始めて、二八歳で死んでいる。その歌は真淵や、子規やらに賞賛されているが、名歌と言われているのは六百余首のうち、せいぜい二、三〇首であって、その他は万葉だの、古今、新古今によりかかった類似、類想の歌である。

彼は京都から歌のお手本を取り寄せて、古今、新古今などに似せた歌を作っていたわけだが、それは画字や書家のタマゴが、名家、名筆を模写したり、なぞったりするのとおなじで、実朝には幸い、文学的資質と、やがて歌が個性的にならざるを得ぬような境遇というものがあつたから、二、三〇の秀歌が生まれたというわけだろう。二八歳で夭折した歌人としては出色であつて、年老いるまで類似、類想の歌を作っていた歌人は、当時も、屑の山ほどいたと思われ

る。貞享二年、「野ざらし」の旅に出た芭蕉は、近江水口で服部土芳と一九年ぶりに再会して、八命二つ中に生きたる桜哉Vという句を作っている。この句は西行の名歌「年たけてまたこゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山」が心に置かれていたというのが諸家の説

から、このイライラは積年の読書によって解決した。解決はしたものの、私には「意味」よりも「声調・歌の調べ」が錦の御旗みたいになつていたのであつた（やがて私が師事することになった波郷が、おりから「や・かな・けり」を唱導した風切時代だったことも、おあつらい向きと言ふべきであつたか）。

ところで、「調べ」ということは、実は類似、類想を呼ぶためにあるようなものであつて、私は俳句のような短詩型文芸が多くの類似、類想を生むのも、一にかかつて「調べ」のためだと思つている。若き実朝が古今だの、新古今だのを手本にして、類似、類想の歌の山を築いたのも、彼がまず学んだのが歌の意味よりも、調べだったからだろう。私には、これもまた当然の成り行きと思われる。

五・七・五・七・七、あるいは五・七・五という調べは、それが名歌、名句になればなるほど、覚えやすくできているから、題詠などになると、思わず知らず類似、類想になる。

四〇年ほど前、私は白河の南湖というところにおいて、八湖の水減りにけり五月雨Vという句を作つて、いい気になつていたら、去来に八湖の水増しにけり五月雨Vという句のあることを知り、あわてて引込めたことがあつた。いつのまにか、去来の句が頭にはいりこんでいたと思われる。

右の場合などは「思わず知らず」の一例で、思わず知らず類似句を作つていたことは仕方がないとして、右の類似句が一向につまらぬのは、そこに作者の「手柄」が見られぬということだろう。

『去来抄』の中に次のような挿話を書いてある。

猪の寐に行くかたや 明の月 去来
この句を作つて去来が芭蕉に見せたところ、暫らく考えているだ

であつて、おそらく、そのとおりだろう。越えて貞享五年、伊勢に参宮して八何の木の花とは知らず句ひ哉V。こちらはもちろん「何事のおはしますかはしらねども」の西行歌を抜きにしては考えられぬ句であつて、赤冊子は「此句は本歌や」として、次のように言っている。「西行の歌を俳にして言出せる句なるべし」。つまりは「類想句」と言つてもいいところを、赤冊子の著者は「俳にして」と言っているわけであつて、「俳にして」は「なつかし」として」と言いかえてもいいだろう（このこと、拙著『俳諧師芭蕉』参照）。

実朝や芭蕉はさておき、われわれ凡百の俳人が、凡百の類似、類想句を作りがちなのも、盗作して点検しようなどという例を除いては、人の句を「なつかし」として「覚えてる結果とも言えるのであつて、結果はどうあれ、俳に惹かれ、なつかしとする気持ちに悪意のあらうはずはない。また、先人の歌句を下取りして、これにすこしばかりの意匠工夫して自家のものにしようとするのも、いじましい文芸の宿命とでも言うべきか。以下、私自身の経験に触れて、主題に込めたいと思う。

私は波郷から俳句を学ぶ以前、別に自分が俳句を作ろうと思わなかつた年少時代に、芭蕉（なかなずく、蕉風の七部集）を読んでいたであつて、何ひとつ分かつちやいないのに八はまぐりの二見に別れゆく秋ぞVだの八あかあかと日はつれなくも秋の風Vだの八梅白しきのふや鶴を盗まれしVだの句を良いように思つていた。なんとなく、十七文字の（あるいは付句などの）調子の良さが気に入つていたのであつて、そのくせ、イライラしていたのは、右にあげた芭蕉の句なども、何を言つてののか分からぬためであつた。何を言つてののか分からなかつたことは、勉強不足ということであつた

けで、いいとも悪いとも言わない。たぶん、芭蕉先生も猪が夜あけになつて、山に帰つて行く風情を存じないのだらう。そう思った去来が自句解釈をすると、先師曰く。Aそのおもしろきところは古人もよく知れば、帰るとて野べより山へ入る鹿の跡吹きおくる秋の上風とは詠めり。和歌優美の上にさへ、かくまでかけり（表現し）、作したるを、俳諧自由の上に、ただ尋常の気色を作せんは、手柄なかるべし。一句おもしろければ、暫く案じぬれど、とかく詮なかるべし。V去来はその後で、同類の歌として「ほととぎす鳴きつるかたをながむれば」を思い出して、いよいよ「手柄なき也」と納得するわけだが、類似、類想の中にも、作者固有の働きはあるべきだと言ふことである。俳句を作つてゆくうえで、しよせん、類似、類想はまぬがれ得ない。しかしまた、そんなことで、作者の個性がまぎれるような文芸でもない、私は信じている。

俳句創作手帳

- 俳句の創作に、ていさいが良くて、使い良くて、携帯に最も便利な手帳としてお勧めします。
- 一頁6句書きで、縦書き140頁一季寄せ付です。
- 表紙を利用して、手帳の中身を差し替えて使えるようになっています。
- 表紙はビニール上質セピア。定価480円。

差し替え用俳句創作手帳(3冊1組)

- 創作手帳の中身だけを3冊1組として包装したものです。
- 3冊1組の定価1,000円一送料共。

特撰 俳句手帳 全巻

- 1頁7句書き、縦書きで1000句以上記録できます。
- 季考、句会吟行書、住所録等を備えた便利な手帳。
- 表紙(ビニール)表紙二種類。横9センチ縦13センチ。
- 定価500円一送料(2冊まで)200円。

携帯用吟行歳時記 定価980円

- 初心者のために、初らわしい季語を採録し、その解説を可成り詳しく記述して居ります。
- 季語の索引は、ひらがなの五十音で順序よい索引の手がかりとしました。
- 各季語ごとに二解説と例句を多数収録して居ります。

※はがき又は電話でご注文下されば即送します。
※代金は現金着後小社振替口座へお振込み下さい。
※全国最寄りの書店でもお求めができます。

発行所 耕文社

〒124 東京都葛飾区東新小岩4-1-12
電話 (03) 697-0824 振替口座東京0-45185